

石川県内の挽物漆器について

向井裕知（金沢市埋蔵文化財センター）

北陸の漆器研究は、四柳嘉章氏の研究によるところが大きい。その成果に基づきつつ、律令的漆器生産から中世的漆器生産への転換過程を、県内出土の考古資料から読み取ってみたい。形態、製作技法のほか、とりわけ北陸においては四柳氏による塗膜分析が多く実施されており、漆下地から渋下地への転換時期などは分析結果から導かれている。

古代漆器出土の遺跡は34遺跡、83点を数える。器種としては、有台碗18点、小皿16点、無台碗15点、無台盤12点と碗類が多く、希少品として稜碗、合子碗、小壺、高杯、筒型容器がある。出土時期は、10世紀頃までには39点が出土しているが、11世紀以降は44点出土しており、古代末に出土量が増加する。以下に年代ごとに代表的な出土品について紹介し、古代から中世にかけての挽物漆器について概観する。

1 出現期の挽物漆器

漆器の場合、共伴遺物から年代を導くことが多く、時期を特定することが難しい場合が多いが、7世紀台の挽物漆器の確実な事例は現段階では未確認である。8世紀前半頃の可能性があるものとして、金沢市畝田・寺中遺跡の無台碗がある。8世紀中頃～後半の盤が金沢市三小牛ハバ遺跡で出土しており、布着せを施した地の粉漆下地で複数の黒色漆層が確認される優品である。小松市松梨遺跡では8世紀後半から9世紀前半の筒型容器が出土している。内外面共に地の粉漆下地、漆層、黒色漆層が確認でき、縦木取りの広葉樹を用いている。他に、年代幅は広いが金沢市中屋サワ遺跡からはツバキ属の小壺が出土するなど多様な器種が確認できる。

2 古代前半の挽物漆器

概ね9・10世紀代を扱う。

羽咋市寺家遺跡では9世紀前半の盤が出土している。布着せ、地の粉漆層に7層の漆層が確認できる非常に丁寧に作られた優品で、横木取りのケヤキを用いる。金沢市戸水大西遺跡からは8世紀末から9世紀末の稜碗や高杯、合子、無台盤が出土している。稜碗は漆下地に複数の漆層が確認できる。また挽物ではないが、漆革箱が出土している。下塗・中塗は省略されているというが、複数層の漆層が確認できるものである。かほく市指江B遺跡から9世紀後半から末の銅製品を模倣したような無台碗の優品が出土している。横木取りのケヤキを用い、布着せ、漆下地、複数の漆層が確認できる。

戸水大西遺跡出土の高杯や津幡町加茂遺跡出土の有台碗、羽咋市四柳白山下遺跡出土の大型底部（壺か）はピットや土坑への埋納に用いられており、漆器利用の一側面を示している。

樹種については、同定がされているもののみの観察にはなるが、基本的にはケヤキが採用されており、例外的にヒノキ（小松市浄水寺遺跡）やトチノキ（金沢市大友E遺跡、同大友西遺跡）などの外来・在地材が少数ながら確認できる。

3 古代後半の挽物漆器

概ね11・12世紀代を扱う。

確実に11世紀代に比定できるものは少ない。金沢市畝田ナベタ遺跡で11世紀前半のケヤキを用い

た無台皿が出土している。金沢市畝田・寺中遺跡からは11世紀末～12世紀代の有台・無台碗が出土している。樹種はケヤキ5点、トチノキ5点、スギ1点と多様である。

12世紀代になると、渋下地漆器や赤色漆塗り漆器が登場する。

12世紀後半の加賀市田尻シンペイダン遺跡出土の小皿は、炭粉渋下地に黒色漆を塗布した製品である。また同遺構では内面赤色漆を塗布した小皿も共伴している。12世紀後半から13世紀前半に位置づけられる七尾市オカ遺跡や穴水町西川島遺跡群御館遺跡では、炭粉渋下地を用いた有台碗や有台鉢が出土している。

赤色漆塗り製品については、12世紀後半の珠洲市柏原ミツハシ遺跡出土のトネリコ属を用いた小皿、先の田尻シンペイダン遺跡出土小皿、13世紀代かとされている中能登町久江サザミヤシキ遺跡出土のブナ属の有台碗がある。なお、黒色漆塗りに赤色漆による漆絵を描くものは13世紀代には出現している。

4 古代から中世の挽物漆器

古代から中世にかけての変化を以下にまとめる。

器種については、古代前半は盤や碗が多く、他に壺や筒型容器、高杯などの特殊器種もみられる。後半になると、碗は定量みられるが、新器種として小皿や無台皿が登場し、12世紀以降は定量を占めるようになる。当該時期は土器編年においても、ロクロ土師器皿からてづくね土師器皿へと製法が変化していくが、器形としては小皿が主体となってくる時期に該当し、食器の使われ方による変化といえる。

樹種については、古代前半にはケヤキを主体とするが、後半にはケヤキの他、トチノキやブナ属などが定量占めるようになり、複数の樹種が選択されるようになる。

渋下地製品の登場は漆器の大量生産を可能とし、普段使いの器として漆器が用いられるようになったことを示しているとされるが、加賀・能登においては12世紀代には確実に登場するようである。ただし、越後では上越市一之口遺跡で10世紀末から11世紀初頭の製品で渋下地漆器がみられるため、加賀・能登においても、11世紀代には出現していた可能性が高い。

また、外面は黒色漆塗りだが、内面を赤色漆塗りする漆器も12世紀には登場する。限られた遺跡からの出土であることから、広範に流通するわけではない。

おわりに

遅くとも12世紀代には渋下地漆器が登場し、定量占めるようになる。13世紀代に入ると、さらに渋下地漆器が増加すると考えられるが、赤色漆絵による優品が登場し、館等の有力者の元に供給されるようである。

今回は挽物漆器製品の動向のみ取り扱ったが、考古学で扱う食器の大半を占める土器・陶磁器の動向と併せて考える必要があり、今後の課題としたい。

なお、今回の研究集会では、四柳嘉章氏の研究によるところが多く、大いに参考にさせていただくと共に、科学分析の重要性を再認識した。また、挽物漆器の集成及び図表の作成は、石川県埋蔵文化財センターの川畑誠氏、久田正弘氏、熊谷葉月氏によるものであり、深く感謝申し上げます。